

# 博士論文の要約

所属：文化科学研究科 比較文化学専攻

氏名：八木風輝

論文題目： Formation of Music of Kazakh Diaspora in Mongolia: A Case Study of the Musical Practices of Professional Performers

本論文の目的は、モンゴル国のカザフ人ディアスポラの音楽の形成と普及を解明し、先行研究[Diener 2009]で言及された「複数の祖国」をめぐる関係性を考察することである。そのため、モンゴル国とカザフスタンの両祖国の関係を軸とし、さらに中国やソ連などが関係する社会主義期から現代の国際関係と社会背景に注目し、モンゴル国のカザフ人の音楽の形成を解明する。

ディアスポラとは、祖先がかつて住んでいた国から離れ、祖国とは異なる国（ホスト国）で生活している集団のことを指す。カザフ人は、現在カザフスタンを中心に、ロシア連邦、中国、ウズベキスタン、モンゴル国に居住している。モンゴル国のカザフ人は、国内の人口の約4パーセントを占め、約10万人がバヤンウルギー県に集住している。当県は、社会主義期の1940年に設立され、県内はカザフ人がマジョリティの位置を占める。そのため、モンゴル国にありながら、カザフ文化が維持されている。当県における職業的な演奏者は、劇団や結婚式での音楽実践を通じて、モンゴル国のカザフ音楽の形成と普及をけん引してきた。本論文は、彼らの音楽実践に焦点を当てる。なぜなら、彼らの音楽実践は、各時代の情勢の影響を受けるとともに、モンゴル国のカザフ音楽の位置づけを確立させてきたからである。

本論文は、6章で構成されている。第1章では、研究の背景と目的、そして先行研究、調査手法、本論の構成を提示した。研究の背景では、モンゴル国のカザフ研究で示されてきた「2つの祖国(two homelands)」が、どのように論じられてきたかを説明した。モンゴル国のカザフ人の中で祖国概念は2つあり、歴史的に祖先が居住していた祖国で、現在のカザフスタンを指し示す *atameken* と *atajurt* (共に *homeland*)、そして、彼らが居住するモンゴル国内、特にバヤンウルギー県内の地を、*tyǵan jer* (*birthplace*) と区別している。この2つの祖国に関する人々の概念を明らかにする視角として、旧ソ連における民族と文化の関係、そして、民族音楽とアイデンティティに関する先行議論を紹介

した。その先行議論を踏まえ、社会主義期の音楽の近代化と、モンゴル政府による国民統合を想定した少数民族の音楽収集と演奏、更にポスト社会主義期の音楽の普及という歴史的展開に沿った本研究の構成を示した。

第2章では、調査地であるモンゴル国バヤンウルギー県とそこに住むカザフ人に関する歴史と民族誌的情報を、生業、食、言語、宗教の視点から示した。その上で、彼らの演奏する音楽の現状について提示した。彼らは、放牧を基礎とした生業を有し、日々の生業や帰属する土地、親族関係に関する曲を、ドンブラという2本弦の撥弦楽器を用いて演奏してきた。

第3章では、社会主義期のモンゴル人民共和国のカザフ音楽の近代化の過程とその影響によって生じたモンゴル国のカザフ音楽の演奏実態を明らかにした。1950年代にバヤンウルギー県では、「バヤンウルギー県音楽ドラマ劇場(Music and Drama theatre in Bayan-Ölgii: BMDT)」が設立された。その結果、カザフ共和国の支援を受けて、当県のカザフ文化を实践する基盤が整えられた。1960年以降、その一環として、音楽教育を受けた演奏者たちが、バヤンウルギー県のカザフ音楽を収集し楽譜集として出版した。BMDT以外の側面に目を向けると、1960年代の中ソ対立という国際関係の緊張下で、バヤンウルギー県は中国とソ連の国境地帯にある県として重要性が高まった。そして、中国側の情報傍受を目的に、バヤンウルギー県地方ラジオ局(Local Radio Station in Bayan-Ölgii: LRSBÖ)が設立された。この活動のために、LRSBÖは、磁気テープや再生機といった当時の最新の音響再生技術を導入した。LRSBÖの設立をきっかけに、LRSBÖの職員とBMDTの演奏者らの主導で、当県の音楽の採譜と録音事業が進められた。この事業で集められた音源は、LRSBÖ内の音楽アーカイブズ *altyn qor* に保管されている。以上のBMDTによるカザフ音楽実践や収集・出版事業と、LRSBÖによる音楽の録音と保存によって、バヤンウルギー県のカザフ音楽は形成された。その一方で、70年代から80年代の首都ウランバートルでは、「モンゴル化したカザフ音楽」がモンゴル人によって演奏された。これは、国立民族歌舞団に所属したD.ホルスレンが担った。国立民族歌舞団は、エスニックグループの音楽を収集し舞台上で演じる組織である。ホルスレンは、バヤンウルギー県等で収集したカザフ音楽を、モンゴル語に訳した歌詞とモンゴルの楽器の伴奏で演奏した。このカザフ音楽は、モンゴル国の国民統合の下で少数民族の音楽の収集と演奏によって登場したものであった。

第4章と第5章は、資本主義経済に移行した後のバヤンウルギー県内の職業演奏者の音楽活動を論じている。1990年代以降、モンゴル国西部の中国とロシアの国境開通やメディアの普及に伴い、社会主義期とは異なる楽曲が流通した。バヤンウルギー県の

カザフ人は、国外のカザフ音楽に触れる機会が増え、演奏される音楽の多様化が進展した。

第4章では、資本主義期に BMDT がどのような活動を行ってきたかを、カザフの「改良楽器」の演奏者の育成と、国内外の劇団とのコラボレーション・コンサート活動から明らかにした。1990年代から、モンゴル国のカザフ人の半数以上がカザフスタンへ移住した。また、資本主義経済へ移行した直後は、各劇団に配分される文化予算が減額された。その結果、1990年代から2000年代の BMDT は、所属の演奏者が大幅に減少し、活動基盤も脆弱になった。しかし、BMDT は2010年以降、活動の幅を広げ始めた。それと同時に、カザフスタンの改良楽器を用いた演奏を続けるために、「実習生」制度を活用し、新入団員に対して楽器や音楽の基礎知識を教授し、改良楽器を学ばせた。2010年代後半から、BMDT は国内外の劇団とのコラボレーションを行うようになった。そのコラボレーションには、BMDT の団長の意向が働いている。この団長は、国政選挙で政権与党になった政党によって擁立された人物である。その結果、国外にコラボレーションを求める BMDT の活動が見られる一方で、国内のモンゴル音楽とのコラボレーションを進める2面性が見られることを、本章では指摘した。BMDT の活動は、社会情勢の変化の中で、戦略的な活動を通じ、演奏形態や内容を維持してきたことを示している。

第5章では、資本主義経済下で新しく職業化した結婚式の司会芸能職「タマダ」が、モンゴル国内でカザフスタンのカザフ音楽を普及する役割を果たしたことを明らかにした。1990年代前半までのバヤンウルギー県では、天幕や各個人の家で結婚式が行われた。1990年代末になると、結婚式のための大規模な宴会場が開設された。タマダは、この宴会場の開設と同時期に職業として誕生し、式進行と音楽演奏を行うようになった。彼らは、式次第の内容を洗練させ、コンサート風の結婚式の形式を確立させた。また、タマダらは、人々から高い評価を得るために、ギターや民族楽器ドンブラによる「生声(jandy dayys)」での演奏から、最新のカラオケ音源(minusovka)を利用した演奏を取り入れることで、民衆を惹きつけようとした。その結果、当該地域でカザフスタンの最新・流行の楽曲が結婚式で盛んに演奏されるようになった。1990年代から続く国内外のカザフ音楽の流通を通じて、タマダたちは、県内の結婚式で、カザフスタンの音楽の普及を進めてきたのであった。

以上を踏まえ、第6章の議論と結論では、次の4点の議論を示し、最後に今後の課題を提示した。1点目は、カザフ人ディアスポラの「複数の祖国」を巡る関係性を、「祖国の非対称性(asymmetry)」と「祖国の対等性(equality)」から考察した。本研究におい

て、「祖国の非対称性」とは、モンゴル国のカザフ人ディアスポラにとってカザフ共和国(カザフスタン)が知識の供給源となったということである。具体的には、社会主義期にモンゴル国のカザフ音楽の近代化(第3章)や、ポスト社会主義期のタマダによるカザフスタンの音楽の受容(第5章)が該当する。その一方で、「祖国の対等性」とは、彼らの音楽演奏において、モンゴル国バヤンウルギー県を祖国とする見方と、カザフスタンを祖国とする見方が、彼らの中に共存していることを指す。これは、モンゴル国のカザフ人の中で歌われてきた独自のカザフ音楽の継承が出版物や録音を通じて進められてきたこと(第3章)を示す。そして、「祖国の対等性」は、社会主義期のカザフ音楽の近代化に見られた「非対称性」による技術の移転によって生み出されたものであった。先行の議論では、モンゴル国のカザフ人の音楽演奏において、2つの祖国が対等に表象されることを提示されていた [Post 2007; 2014; Daukeyeva 2014; 2016]。本論文では、これらの先行の議論を「対等性」に位置づけた。

2点目は、ホスト国とディアスポラを巡る関係である。社会主義期モンゴル国における国民統合において、モンゴル国の少数民族の音楽は二つの異なる視点から議論されてきた。第一は、社会主義期の政策によって少数民族音楽が抑圧されたという解釈である [Pegg 2001]。第二は、少数民族の音楽が伝統音楽として収集・発信されている点で、抑圧的ではないという解釈である [Tsetsentsolmon 2015]。本論文では、社会主義期にカザフ音楽を歌ったモンゴル人 D.ホルスレンの活動 (第3章)から、「モンゴル化したカザフ音楽」の存在を明らかにした。そして、先行の研究が、音楽の演奏内容(抑圧的な解釈)を観察したか、音楽の収集と演奏のプロセス(非抑圧的な解釈)を観察したかによって、異なる解釈に至った可能性を指摘した。

3点目は、周辺国とディアスポラとの関係である。バヤンウルギー県は、南を中国の新疆ウイグル自治区、北をロシア連邦のゴルノアルタイ共和国と接している。この地理的な位置関係によって、バヤンウルギー県は中ソ対立に巻き込まれ、LRSBÖの音楽アーカイブ *altyn qor* に地元のカザフ音楽が保存されることになった。また、ポスト社会主義期には、主に中国新疆ウイグル自治区からカザフ語の音源がバヤンウルギー県に流入し、現地の音楽演奏にも影響を与えたことが明らかとなった。

4点目は、音楽の普及である。社会主義時代の音楽の普及は、劇団のコンサートやラジオ放送を通じて行われた。それは、演奏者から聴衆への一方通行のコミュニケーションであった。それとは対照的に、ポスト社会主義期のタマダは、聴衆の嗜好を捉え、結婚式の音楽演奏と実践に反映させる双方向の相互作用を特徴としていた。

今後の課題として、筆者は4点の内容に言及した。1点目は、モンゴルのカザフ人デ

ディアスポラと祖国との関係の非対称性の詳細である。カザフスタンとモンゴルの民族政策が国境を越えて心理的に優劣をつけていたのか、それが非対称性と関係していたのかを、今後、社会主義期に演奏活動を行っていた演奏者への聞き取り調査と公文書の精査を通じて明らかにする必要がある。2点目に、モンゴル国以外に居住する中央アジアのカザフ人ディアスポラの音楽活動に、2つの祖国の関係が共通して見られるかどうか、その研究事例を蓄積することである。3点目に、第3章で検討した *altyn qor* の音源分析を通じた、過去と現在の歌の内容の比較である。4点目は、第5章で述べた、*tamada* の音楽実践の地域間比較研究である。彼らは、中央アジアのディアスポラのみならず、現代社会における音楽の普及を研究する上で重要な研究対象であり、今後の中央アジアの音楽を研究で欠かせないアクターとして位置づけられるだろう。